

熊野の
本林から

怪熊野

「旧・白浜町の怪異(其の二)」
其の(五七)

和歌山大学
システム工学科
環境システム学
中島敦司教授



観光地と名高い白良浜の沖には、海の河童「甲羅法師」が潜んでいるという。

観光地として名高い白浜町には海にすむ河童「甲羅法師」の話が伝わる。泳いでいる子どもを脅したり、足を引っ張って深みに引きずり込んだり、夜は陸に上がって畑の大根を引き抜き、勝手に芋を掘ったりして村人を困らせていた。ある夏の日の夕方、砂浜でお百姓の彦左を見掛けた甲羅法師は「彦左、彦左」と声を掛けた。彦左は「おーい」と返事をしたところ、甲羅法師が海から上

がつてきた。村で一番の力持ち彦左は甲羅法師に「相撲を取ろう」と持ち掛ける。相撲自慢の甲羅法師は誘いに応じたものの、簡単にひっくり返されてしまう。頭の水皿から水のこぼれた甲羅法師は弱り、彦左に取り押さえられ「もう悪さはしないから」と命乞いする。彦左は陸に上がる際の条件として「白良浜の白砂が黒くなる」、「(岩礁の)沖ノ四双島(しそうじま)に松が生える」など、あり得ない約束を強要した結果、甲羅法師は二度と陸に上がれなくなったという。違う話では、甲羅法師は海ではなく十九淵(つづらぶち)の川にすんでいて、そこから温泉を求めて白良浜に行った際に彦左に退治されたという。才野の安久川にも河童が出たというが、これは串本の田並の河童ゴツタレボウシの話と同様、捕まった際に「炒り豆が芽生えるまで出てこない」という約束をさせられる。

平成16年、高瀬川付近の農地で一本足とみられる謎の生物の足跡が二度にわたって発見されたことがあった。地元では、河童の一種カシヤンボのものではないかと噂になった。カシヤンボは、夏に川にすむ河童ゴランボが冬になって山に登ると変化する一本足の河童である。ところが、足跡には水かきがなかったため、一本足の妖怪ひとつダタラの足跡だという説もあった。ひとつダタラはタタラ場、つまり鉾山と関係が深いといわれるが、高瀬川付近には富田坂タタラ群遺跡があり、ひとつダタラの足跡説もあり得る話かもしれない。かの南方熊楠が知識人として高く評価していた田辺市の生け花の師匠、広畑岩吉から聞いたとして高瀬川の河童の話を紹介しており、カシヤンボ説もあり得る。足跡の主が誰なのか、次に足跡が確認された時には分かるかもしれない。



平成16年、高瀬川付近の農地で「一本足とみられる謎の生物の足跡が二度にわたって発見された。地元では、河童の一種カシヤンボのものではないかと噂になった。

中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

